



東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター
潮田ヒューマニティーズイニシアティブ「公募研究 A」成果報告書

研究課題(和文): 社会主義中国文化の研究

研究課題(英文): Study on Chinese Culture during the Socialism era.

申請者名・所属先: 鈴木将久 人文社会系研究科

海外招聘者名: 賀照田(中国社会科学院)

1. 研究の目的

本研究は、日常生活の実践とその思想的背景を中心として、文化の領域において中国の社会主義の経験をとらえ直そうとするものである。

2. 研究開始当初の背景

社会主義時代の中国について、従来の研究では、日本でも、また中国国内でも、主としてイデオロギーの面が論じられてきた。とくに毛沢東時代には、イデオロギー的得失について多様な議論がなされている。しかし中国において社会主義は、イデオロギーであるばかりでなく、日常生活にも浸透している歴史的経験である。しかも日常生活を無意識のうちに制約している社会主義の経験は、現在の中国を理解するためにも重要な視点である。そこで本研究では、同時代感覚を重視して 20 世紀中国の思想と文化を幅広く研究している賀照田氏を海外招聘者として迎え、社会主義時代の中国におけるさまざまな経験について、多方面の資料をまとめ、議論をすることによって、社会主義中国文化をとらえ、現代の中国を見るこれまでとは異なる視点を見出すことを目指した。

3. 研究の方法

当初の予定では海外招聘者の賀照田氏を東京に迎え、学内の研究者、大学院生を含めて研究会を組織する予定であったが、コロナのため来日がなくなかった。そのため個々で研究を進めて、数回の活動を行うこととした。まず公開で二回のセミナーをオンラインにて開催した。また賀照田氏の経験を歴史的に位置づけて、その多面的な意味を明らかにすることが、本研究において大きな意味を持っていると考えられるため、鈴木将久と賀照田氏のオンラインの対談を合計 9 回にわかって実施した。さらに社会主義中国の問題は、中国だけの問題ではなく、東アジアの知識人がともに考えるべき問題であることに鑑み、日本、中国、台湾、韓国の研究者をあつめたオンラインの討論会を開催した。

4. 研究成果

以下の活動を行った。

- 1, 第 46 回オープンセミナー「中国を深く理解する方法としての「革命—ポスト革命」2021 年 11 月 18 日、オンライン開催。報告者: 賀照田、コメンテーター: 石井剛、司会: 鈴木将久。



賀照田氏が現代の中国を理解するための認識および研究方法として導きだした「革命—ポスト革命」という視座について、その概要および今後の見通しについて議論を行った。

2, 第 61 回オープンセミナー「中国「第三世界論」の思想的体質:1974 年鄧小平の国連総会演説をてがかりとして」2022 年 4 月 9 日、オンライン開催。報告者:賀照田、コメンテーター:村田雄二郎、司会:鈴木将久。

中国の第三世界論の代表的な文献である 1974 年鄧小平の国連総会演説を分析し、中国の自己感覚と世界感覚を歴史的に問い直した。

3, 賀照田と鈴木将久のオンライン対談。2021 年 9 月 29 日、10 月 6 日、10 月 13 日、10 月 20 日、10 月 27 日、11 月 24 日、12 月 1 日、12 月 8 日、12 月 15 日。

賀照田氏と鈴木将久のこれまでの歩みを歴史的に位置づけながら、それぞれの問題関心をまとめた形で表現することを試みた。

4, オンライン討論会「東アジアの視角における『革命—ポスト革命』」2022 年 11 月 13 日、11 月 20 日、オンライン開催。

日本、中国、台湾、韓国から合計 9 名の報告者と 2 名のコメンテーターを招き、韓国の白池雲氏の文章を中心として、非公開にて集中的に議論を行った。

以上のうち 1、2、3 の活動についてはヒューマニティーズセンターのブックレットとして公開すべく準備中である。第 4 の活動についても、別の形で成果を公開することを計画している。

5. 主な発表論文等

〔図書〕

2023 年度刊行予定「現代中国の歴史と思想 東京大学ヒューマニティーズセンター オープンセミナー第 46 回、第 61 回より」(仮題)

2024 年度刊行予定「現代中国をどう見るか 賀照田氏との対話」(仮題)

6. 招聘フェロー(海外招聘者)からのコメント

これまで 20 数年、私は日本の中国研究界と密接な交流をしてきました。中でも東京大学人文社会科学系研究科の鈴木将久氏との協力は、最も長期にわたり、密接なものでした。鈴木氏は日本、中国、東アジアについての深い理解を基礎として共同研究を計画しました。この共同研究について、私も意義を理解しています。それゆえ私も情熱、責任感を持つことができました。たとえば二回のセミナーでは、日本の研究者が関心を持ち、中国に聴衆にも魅力的なテーマを選びました。また 9 回にわたる対談では、彼の問いが正確で、私の状況と符合していたため、私の積極性が引き出されました。このように鈴木氏との共同研究は、中国にとっても意味のあるものです。しかも私一人では思いつかず、中国内部の共同研究では構想されず、これだけの成果を挙げられないものです。それゆえ私はこの機会に深く感謝しています。